

10 ストーマ疑似体験レポートから見た学習効果

○橋本 裕, 小河 育恵 (関西福祉大学看護学部)

I. はじめに

看護基礎教育の中でストーマ造設患者への援助を学生に学習させるために、これまでパウチ貼付の体験(綱島 1995、兼松 2005)やVTRの聴取や紙上患者の展開(上田 2004)がなされ、その効果が報告されてきた。しかし、看護学生にとって、ストーマ造設患者の機能喪失およびボディ・イメージの変容、それに伴う日常生活支援を具体的に理解することは難しい状況にある。そこで、実物に近い柔軟なストーマモデル(ストマ君)を用いたストーマ造設疑似体験を実施した結果、学生は一般論ではない日常生活での困難さや支援内容を見出したので報告する。

II. 研究方法

1. 対象：A大学3年次生で研究協力が得られた学生43名のレポート。
2. 方法：演習時ストーマVTRによる事例の提示、ストーマモデル(ストマ君)およびパウチを演習当日の入浴時まで貼付したままで普段と同じ日常生活を送り、その体験をレポートにて提出。提出されたレポート内容の文脈を抽出し、データとした。
3. 分析：ストーマ疑似体験レポートの記述内容をデータマイニング手法にて語の出現頻度をみた。また学んだ内容の文脈を抽出し、内容の要約から小分類、中分類、大分類へと抽象化しながら導出し、大分類を代表する適切なネーミングをする。分析結果の偏りを避け、データの信頼性を確保するために、データを研究者同士が交換して再度検討を行った。
4. 倫理的配慮：対象者に口頭および文書にて研究の目的と方法について説明し、研究参加拒否による不利益がないことを説明し、同意を得た。B大学研究倫理審査委員会に申請し、承認を得た。

III. 結果

ストーマ疑似体験レポート43件のうち体験から修得した内容を601文脈抽出した。それら文中の語句で出現頻度の高い順にストーマ69回、パウチ39回、他者への意識31回、臭い、悲しみ、排泄等であった。記述内容から、①『行動に制限が生じる』、②『ストーマ受容の困難さ』、③『パウチ使用に伴う困難さ』の3つの大分類を命名した。また①の中分類に「行動に制限が生じる」「衣服着脱時に邪魔になる」「衣服選択に制限が生じる」「外出に伴う苦痛が生じる」「食事に制限がある」「便が不随的に出る」「援助の必要性となる」であった。②の中分類は「ストーマが見えることで不快になる」「ストーマの受け入れ困難さ」「劣等感や苦痛を生じる」「他者の視線が気になる」「患者と家族への支援が必要である」「ボディ・イメージの変容と苦痛」であった。③の中分類に「臭いがもれることが不安」「パウチ使用による困難さ」「皮膚障害を生じる」に集約できた。疑似体験を通して学生は、服装や発汗に伴う不快感を体験し、書籍に書かれない苦痛を実感した具体的な表現であった。

IV. 結論

生活体験が少ない学生は、看護基礎教育の中で患者への援助を書籍等の内容を丸写しであり、思考が深まらない場合が多い。疑似体験学習は、より患者の生活に関心が深まることに繋がった。